

「外国人にわかりやすい文書」を書くための配慮
— 「やさしい日本語」の作成ルール」の効果とその活用—

VARIOUS CONSIDERATIONS IN WRITING
EASILY-UNDERSTOOD DOCUMENTS FOR NON-NATIVES:
FOR MORE EFFECTIVE UTILIZATION OF *THE RULES FOR WRITING "EASY JAPANESE"*

宇佐美洋, 国立国語研究所

Yo USAMI, The National Institute for Japanese Language and Linguistics

1. 問題意識

多言語化・多文化が進む今日の日本社会において、社会的安寧を保つためには、社会への「新規参入者」である日本語非母語話者（以下 NNS）と、「古参参加者」である母語話者（以下 NS）が人的交流を行い、相互理解を促進することが必要である。またそのためには、NNS 側に日本語習得を促すだけでなく、NS 側も、NNS にとって理解しやすい表現の工夫を行うなどの歩み寄りが重要である。

そこで本論では、これまで特に NNS との頻繁な接触経験を持たない NS に対し、「NNS 向けのお知らせ文書」を作成してもらい、そのプロセスにおいてどのような工夫や配慮が行われているかを調査し、そうした工夫や配慮の中で特に効果的と思われるものは何かについて考察を行うこととした。

2. 弘前大学「やさしい日本語」にするための 12 の規則」

弘前大学佐藤研究室では、上記のような問題意識に基づき、「やさしい日本語」という概念の普及・広報を行っている。特に災害時に、日本在住の NNS に対し適切な情報を確実に伝えるためには、NNS の母語を使用するほか、「やさしい日本語」による情報伝達を行うことが効果的、という主張を行っている。

NNS にとって分かりやすい文書を書く際、効果的と思われる工夫を簡便にまとめたものが「やさしい日本語」にするための 12 の規則¹⁾である。ここでは、NNS にとって理解しやすい文書を作成する際配慮すべきことが、例えば「(1) 難しいことばを避け、簡単な語を使ってください」「(2) 1 文を短くして文の構造を簡単にします (以下略)」のような端的な規則とそれについての解説としてまとめられ、web ページ上で公開されている。今回の調査では、この「12 の規則」がどの程度効果的に働きうるかを検証することも目的に含めることとした。

3. データ収集

今回の調査のため、以下のような手順でデータ収集を行った。

- 1) 調査会社を通じ、「これまで NNS との頻繁な接触経験を持たない

成人 NS」35 名を、性別・年齢層・職業等に偏りがないよう選定して調査協力を依頼。

- 2) 上記調査協力者に対し、「自分を地域自治会の役員であると想定し、近隣に住む外国人をその自治会に勧誘する際に提示するチラシを、MS-Word を使用し A4 サイズ 1 枚で作成してほしい」と依頼。その際、協力者の半数（A 群 18 名，A01～A18）には「12 の規則」の URL を示して参考にするよう伝え、残りの半数（B 群 17 名，B19～B35）には何も示さず自由に作成するよう伝えた。
- 3) チラシ作成後、作成のプロセスを振り返り「工夫したこと、難しかったこと」を 400～800 字程度の「振り返りレポート」として報告するよう依頼。

チラシ作成に当たっては、協力者によって自治会の具体的活動内容についてのイメージが異なることが想定されたため、実在の地方自治体が発行している「自治会ハンドブック」を抜粋・一部改変して示し、そこに書かれている内容に基づきチラシを作成するよう求めた。また、「ハンドブックに書かれているすべての情報をチラシに含める必要はなく、適宜取捨選択や再構成を行ってよいこと」「文字のフォント・色等は自由に変えて構わないこと」「図表やイラストなどの挿入も可能であること」「勧誘対象の外国人は英語が分かるとは限らないため、英語のチラシにはしないこと」なども留意事項として伝えた。

4. データ評定

得られた 35 名分のチラシデータの「分かりやすさ」を評価するため、以下 4 つの指標を使用することとした。

1) 文字数

チラシ内の文字数が多いほど単純に読みにくさは増すものと考えられる。ただしチラシ内の漢字にルビがついているデータについてはすべてのルビを外して字数算出を行った。またテキストボックス・ワードアート内の文字もすべて数えた。

2) リーダビリティ（RB）値

李・長谷部・柴崎（2009）、柴崎（2014）等で紹介されている「テキストの読みやすさ」の指標である。与えられたテキストに対し形態素解析を実施し、平均文長、動詞や助詞の含有率などのテキスト特徴量から、そのテキストの「読みやすさ」を 0.5～6.4 の数値として示す²。数値が大きいほど読みやすいとされるが、この「読みやすさ」はあくまでも計量可能なテキスト特徴量に基づくものであり、文章の内容は一切考慮されない。

3) 情報精選度

「自治会への勧誘」という目的に照らし、多すぎも少なすぎもしない情報が適切に取捨選択されチラシ内に提示されているかを、表1に示したルーブリック（パフォーマンス評価の際に用いる採点ガイドライン）に基づき、筆者を含む2名のNS（日本語教育研究者）が4段階で評定した。評点のずれが1点の場合はその平均値を最終評定とし、2点ずれた場合³は2名で協議のうえ最終評定を決定した。

4) デザイン

視覚的効果に配慮し、各種情報がA4サイズ用の紙上に適切に配置されているかを、情報精選度と同様、表1のルーブリックに基づき4段階で評定した。この項目については評点のずれはすべて1点以内に収まったため、2名の評定値の平均を最終評定値とした。

表1 情報精選度・デザインのルーブリック

	情報精選度	デザイン
4点	自治会がどういった団体なのか、何をやる団体なのか、多すぎも少なすぎもしない具体例をもって、分かりやすく示されており、かつ、その団体への「勧誘」という文書の目的が明らかに分かるようになっている。さらに、「自治会入会のメリット」「会費の用途」のいずれかが示されている。	文字の色・大きさの適切な変化」「イラストや写真の挿入」の両方がみられるだけでなく、全体としてバランスのよいデザインがなされ、読み手の目を引く視覚的効果をあげている。
3点	自治会がどういった団体であるかはおおむね分かるが、「勧誘」という文書の目的が明確には示されていない。あるいは自治会の活動内容について、説明にやや分かりにくいところがある。	文字の色・大きさの適切な変化」「イラストや写真の挿入」の両方がみられるが、特に高い視覚的効果を挙げているとまではいえない。
2点	自治会がどういった団体であるかについて、明確な説明が与えられていない。あるいは情報が精選されていず、自治会について紹介するにあたって必ずしも必要とは考えられない情報が含まれている。	文字の色・大きさの適切な変化」「イラストや写真の挿入」のいずれかがみられる。
1点	自治会がどういった団体であるかがほとんど示されていないか、読み手に大きな誤解を与えかねない書き方になっている。あるいは自治会について紹介するにあたって必要とは思われない情報が長々と示されている。	文字の色・大きさの適切な変化」「イラストや写真の挿入」のいずれもなく、視覚的効果に配慮した形跡が見られない。

なお、「NNSにとって分かりやすいか」という研究の趣旨に照らすならば、チラシの評定はNSではなくNNSに依頼すべきではなかったか、また研究者が設定した基準に基づいてではなく、評定者個人の持つ価値観に基づいて評定を依頼すべきではなかったか、という批判は当然予想できる。しかし今回は、以下2点の理由に基づき、本節で示した基準に基づく評定を行うこととした⁴。

- 1) 「自治会」について予備知識のないNNSにとっては、自治会についての情報が過不足なく含まれているかどうかの判定は困難と考えられる。
- 2) この種のチラシを見たときどのような観点・基準で評定を行うかは、評定者個人によってかなり大きな差異があることが予想される。限られた数の

NNS に対する調査のみを行い、それが NNS 一般の評定結果であるような印象を与えることは危険。

5. A 群（規則参照群）・B 群（非参照群）比較

では、「12 の規則」を参照した A 群と参照しなかった B 群について、成果物としてのチラシにどのような違いがあったかを、前節に挙げた 4 つの項目による評定結果の平均値から検討していく。

表 2 評価項目ごとの評定値平均

	文字数	RB 値	情報精選度	デザイン
A 群	298	3.72	2.69	2.41
B 群	425	3.47	2.41	2.29

RB 値、情報精選度、デザインのいずれの項目についても一貫して A 群が B 群より高い値を示しているが、その差はわずかであり、 t 検定によって平均値の差を検討したところ 5% 水準での有意差は見られなかった。文字数の平均については B 群が A 群の 1.4 倍に上るが、ここでも 5% 水準での有意差は見られなかった。つまり、「12 の規則」を参照したほうがより分かりやすいチラシが作れる、というわけでは必ずしもなかったことになる。

文字数の平均値にはかなりの差があるにもかかわらず有意差が出なかった理由としては、B 群に極端に文字数の多いデータ（601 字以上、最大 859 文字）が 4 件あり、この少数のデータが全体の平均値を押し上げてしまったということが考えられる（次ページ図 1 参照）。A 群には極端に文字数の多いデータはなく（最大でも 528 文字）、それは「12 の規則」を参照した影響である可能性があるが、両者の関係は今回のデータからは明確でない。

6. 評定値上位・下位のチラシ選定

前節での検討による限り、「12 の規則」の参照の有無は、成果物としてのチラシの分かりやすさに顕著な影響を及ぼしているとは必ずしも言えなかった。では、「12 の規則」の参照の有無とは関係なく、「分かりやすいチラシ」を作成できた協力者と、「分かりやすいとは言えないチラシ」を作成してしまった協力者とでは、チラシ作成時に行った工夫や配慮にどのような違いがあったのかを見ていきたい。

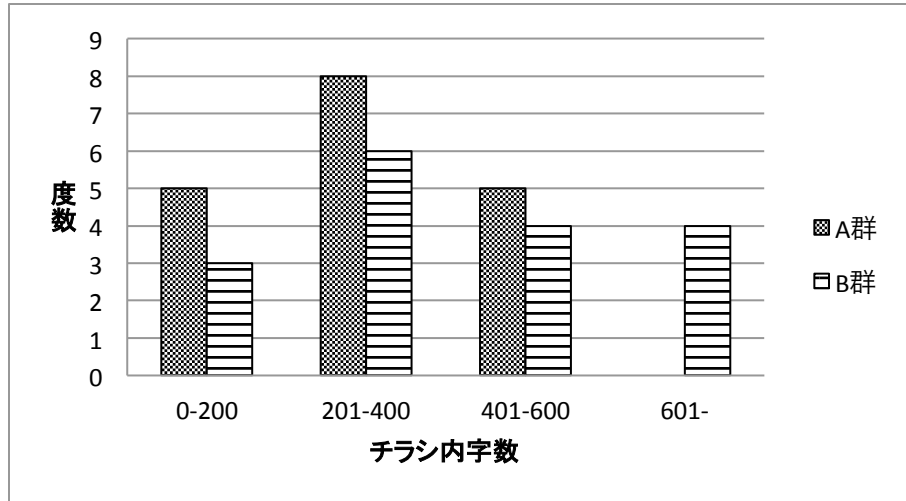


図1 A・B両群のチラシ内字数の分布

そこで35のチラシを「分かりやすさ」によって評定し、「上位5位まで」、「下位5位まで」のチラシを選出するため、以下の手順でチラシの評点化を行った。

● 「文字数」の評点化

「チラシ内文字数」は、以下のやり方で評点への換算を行った。

～200字：4点，201～400字：3点，401～600字：2点，601字～：1点

● 各項目に対する重みづけ

「分かりやすさ」に関する4指標（「文字数 [評点]」「RB値」「情報精選度」「デザイン」）の評点に対し以下の重みづけを行い、加算することで、各チラシの総合評点を算出した。

$(\text{文字数 [評点]} \times 1) + (\text{RB 値} \times 2) + (\text{情報精選度} \times 3) + (\text{デザイン} \times 1)$

各項目の重みづけ設定の理由は以下のとおりである。

- ・「文字数」は、多いほど読みにくさは増すが、必要な情報を伝えるためにはある程度の文字数が必要でもあり、「少なければ少ないほどよい」というわけではない。このため重みづけは軽くした。
- ・「RB値」「情報精選度」はともに「分かりやすさ」を評価する際極めて重要な項目であると考えられるが、「情報精選度」の満点が4点であったのに対し、「RB値」の満点は6.5点（実際の最高点は6.06点）となっている。そこで「情報精選度」の方により重みを持たせることとし、「RB値」には2倍、「情報精選度」には3倍の係数を乗じた。
- ・「デザイン」も重要な観点ではあるが、これについては協力者本人のPCスキルの多寡が大きな影響を及ぼすと考えられるため⁵、重みづけは軽くした。

上記の手順により、以下 10 編のチラシを上位 5 位・下位 5 位として選定した。

表 3 上位 5 位・下位 5 位のチラシデータ

	順位	文字数	RB 値	情報精選度	デザイン	総合評点
B21	1	4(126 字)	5.9	3.5	3.5	29.8
B31	2	3(286 字)	4.8	4.0	2.5	27.1
A08	3	3(262 字)	4.2	3.5	3.5	26.7
A06	4	3(296 字)	4.5	3.5	3.5	26.0
A18	5	3(262 字)	4.2	3.5	3.0	24.8
A16	3 1	3(285 字)	2.2	2.0	2.0	16.5
B26	3 2	1(681 字)	3.4	2.0	1.0	14.8
B20	3 3	1(859 字)	1.6	1.5	2.0	10.7
B19	3 4	1(742 字)	2.0	1.5	1.0	10.4
B25	3 5	1(715 字)	1.3	1.0	1.5	8.1

7. 協力者の「チラシ作成振り返りコメント」

これら上位 5 位、下位 5 位のチラシを作成した協力者が、チラシ作成時にどのような工夫や配慮を行っていたかを、チラシ作成後の「振り返りコメント」から探っていくこととする。協力者は様々な工夫や配慮を行っていたが、上位の協力者・下位の協力者が行っていた工夫や配慮には一定の共通点が見いだされた。

7.1 下位協力者のコメントの特徴

7.1.1 細部へのこだわり

下位協力者のコメントには、「語や表現を言い換える、ということにこだわり、言い換えた結果どうなるか、そうした言い換えにどのような意味があるか、ということとはあまり考慮していない」という特徴がみられた。例えば以下のような例である（下線は引用者による。以下同じ）。

- まず、防犯防災という文字を災害や犯罪の予防という文字に変えてみた。

防犯防災と聞いて外国の方が分かるかな?と思ったのでより噛み砕いて書き表してみた。次に、地域環境保全という文字を地域の環境を綺麗に保つという言葉に言い換えた。(中略) 次に、住民親睦という言葉は住民同士のコミュニケーションという言葉に変えた。(中略) 少子高齢化という我々日本人が聞いても難しいと思う言葉は、生まれて来る子供の数が減り、お年寄りの数が増える事と長くなったが詳しく書いてみた。

(B19)

この協力者の振り返りコメントは、そのほとんどが「外国人にとって難しいと思われる単語を...に言い換えた」という説明に終始しており（引用部分の後にもさらに続く）、そのほかの工夫や配慮はほとんど示されていなかった。コメントの末尾には、

- 元の文や言葉を外国の方向けに噛み砕いて書くと、少し長くなってしまふなという印象を受けた。(B19)

という記述もあり、書き換えでかえって冗長になってしまったという認識はありながら、そのことについての手当ては特になされなかったようであった。

また、別の協力者からは以下のようなコメントも見られた。

- まず、日本には独特の『言い回し』が存在する、という事を念頭に置いてチラシを作成しました。例えば、日本人は軽食と一緒に飲みものを飲む事を日本では『お茶をする』と言います。しかし、外国では『breake』(マ)という、『小休憩』といった(マ)意味の言葉はありますが、日本で言う『お茶』とは少々ニュアンスが違います。これをどの様に表現しようか悩みました。(B20)

日本語独特の「言い回し」(慣用表現)をどう表現するかということに悩んでいるが、これは自治会への勧誘にあたってあまり重要なこととはいえないだろう。

7.1.2 規則を墨守しようとする態度

「12の規則」には「すべての漢字にルビ(ふりがな)を振ってください」という指示があり、以下のような例が示されている。

「頭(あたま)の 上(うえ)に 気(き)をつけて ください」

「電(でん)話(わ)を 使(つか)うことが できます」

「12の規則」では、おそらくはwebページ上でルビを漢字の上に振ることが技術的に困難という理由から、漢字の後にカッコに入れてルビが示されている。しかしここではもちろん「漢字の読みを何らかの方法で示す」ということが大切なのであり、ルビは漢字の上に振ってもまったく差し支えはない(むしろそちらの方がはるかに読みやすく、A群の協力者の多くは漢字の上にルビを振っていた)。しかし下位の協力者の中には、以下のようなコメントを記す人もいた。

- ルビの振り方で、漢字の右隣に付けると、読み難いと思い、普通に漢字の上に付けてしまったが、それは、駄目だったのか？(A16)

こうした迷いの背後には、規則の指示の本質的な意味をとらえてそこに合わせるというのではなく、「規則の指示に文字通りにしたがって作業を進めるべきだ」という意識があったことがうかがわれる⁶。

7.1.3 自己の信念の開陳

協力者のコメントの中には、「自らの信念」について熱く語っているものも見うけられた。典型的には以下のようなものである。

- 外国人でも中途半端に教養のある人は、日本人が集団的で個性がなく、中央集権的であると誤解している人が少なく無いとも思われる。しかし実際の日本史では中央集権が行われた時期は7世紀にシナの影響を受けた時代、近代の開国を迫られた時代という例外的な時期のみであり、基本的には地方の自治が尊重されていたことなど、(中略) 日本文化が他の東アジア諸国とは全く異なることなどを説明したかったが、字数の関係で端折らざるを得なかったのが残念。(B25)
- 日本には、外国にはない特有の習慣があります。それは『省略』の多様(マ)です。これは、来る2020年東京オリンピックの開催に向けても、改正していかなければならない点です。(中略) 確かに外国にも会社(corporation)の事を(corp.)などと略する事がありますが、それは頭の文字(corp)を残し、残りを略しているのであって、真中を省いて前後を引っ付ける、と言うような略し方は外国では、通例しません。この様な略仕方(マ)は日本独特のもので。(B20)

これらのコメントの背後には、「日本は他の諸外国とは違う」という認識があり、それを外国人に伝えたい、あるいは改めるべきだ、という思いが認められるが、こうしたことは「自治会への勧誘」という今回のチラシの趣旨と関係が深いとは言えない。

7.2 上位協力者のコメントの特徴

では、上位協力者のコメントにはどのような特徴がみられるだろうか。

7.2.1 規則を適宜取捨選択して活用

まず、コメントの一例を示そう。

- (「12の規則」について)内容も幅広くまとめられており、新鮮な気持ちで読むこともでき、大変参考になりました。(中略)「12の規則」から下記の点を参考にしてチラシを作成しました。(A08)

このコメントからは、「12の規則」から新しい学びや気づきを得ながらも、それをそのまま墨守するのではなく、自律的に適宜取捨選択しつつ規則を活用していたことがうかがわれる。

7.2.2 自ら新たな作成方針を発案

上位協力者のコメントの中には、「12の規則」にはない新しい作成方針を自らその場で発案し、それを活用している例が多数見受けられた。例えば以下のよう

なものである。

●勧誘する人ではなく、勧誘される人の目線に立って、自治会に入会する際に知りたい知識をまとめた。

●簡単な質問／回答の形式をとり、自治会の必要性をわかりやすく訴えた。

(以上 A18)

読み手の立場に立った時、どのような情報が必要かを想像し、そういう情報に絞ること、また Q&A 方式を活用することにより伝えるべき情報を端的に伝えることなどは、「12 の規則」には明示されていない独自の工夫であった。

また、以下のようなコメントも見られた。

●自治体参加を促す文章では、「ご案内」や「お知らせ」といった表題で書かれている文章をよく目にしますが、それでは「自分には関係ない」とか「誰かがやってくれている」という印象を日本人でも持ってしまいます。そこで私は、「あなたのチカラを貸してください」という「お願いする」形式で書いてみました。

●これは個人的な考えですが、勧誘のちらしにイラストが入っていると、ある種の「余裕」を感じます。イラストは大抵が笑っているものが多く、そんなに困っていないのではないかという印象を受けるからです。自治体の活動は「楽しいもの」や「幸せなこと」ではなく、自治体に入って活動することで「楽しさ」や「幸せ」が得られるのであって、初めからイラストのような印象を与えてしまうと、逆に加入しなくても「安全な町」であると勘違いされてしまうのではないかと思ったので、イラストは使用しませんでした。(以上 B21)

この協力者は、「自治会とは単なるサービス機関ではなく、住民が自発的に参加することにより地域をよりよくしていくための機関である」という位置づけを自ら行っている。それに沿って「参加者のコミットメント」を求めるような呼びかけをし、あえて「イラストは使用しない」という判断も行っていたことが分かる。

8. まとめ

今回の調査からは、以下のようなことが明らかになったと言える。

- 1) 「「やさしい日本語」にするための 12 の規則」には、「少ない文字数で説明することを促す」という効果がある可能性が示された。しかし、単に「12 の規則」を示し、それを参考にするよう求めるだけでは、必ずしも十分な効果が発揮できるとは言えない。
- 2) 分かりやすい文書を作成できなかった協力者には、「個々の文言の言い換えにこだわっている」「規則に文字通り従おうとしている」「文書の目的とは関係の薄い自らの信念を開陳しようとしている」などの特徴がみられた。

- 3) 一方、分かりやすい文書を作成できていた協力者は、文書の目的を十分に意識し、それを達成できるような工夫をその場で自ら考案し、実施していた。「12の規則」を参照した協力者も、規則の文言をそのまま守ろうとするのではなく、目的に合わせ、適宜取捨選択の上活用を行っていた。

「12の規則」は、NNSにとって分かりやすい文書を書くための「最初の手掛かり」としては非常に有効なものであるが、この規則を守っていさえすれば分かりやすい文書が書けるわけではない。規則を参考にしつつ批判的に検討し、状況に合わせ適切な、独りよがりでない書き換え方針を自ら考え出していけるようになることが大切なのであり、そのための研修システムの開発が、今後強く求められることになるだろう。

注

- ¹ <http://human.cc.hirosaki-u.ac.jp/kokugo/EJ9tsukurikata.ujie.htm> にて公開。
- ² <http://jreadability.net/>にてテキストのリーダビリティ判定ツールが公開されており、任意のテキストを貼り付けることでリーダビリティが自動的に判定されるようになっている。難易度の水準は、おおむね以下のように判定できるという。初級：4.5～6.4点、中級：2.5～4.4点、上級：2.4～0.5点。
- ³ 評定値が2点ずれたのは35件中2件であり、他の評定値は1点以内のずれに収まった。
- ⁴ しかしいうまでもなくこのことは、NNSによる評定調査が不要であるということの意味するものではない。ただNNSによる評定調査を行うためには、別途慎重な調査デザインが必要となるため、今回についてはその方法はとらなかったということである。
- ⁵ 今回の調査では、「チラシ作成者がどのような工夫をしたか」というところに焦点が当たっている。作成者の中には、心内で「分かりやすくするための工夫」は十分に行っていないながらも、PCスキルが不十分なためそれを実現できないでいる人もいたと考えられる。このため「デザイン」という項目には過重な重みは負わせないこととした。
- ⁶ もっとも、このような解釈をしてしまう人があり得ることは事実である。「12の規則」のこの項目の示し方には何らかの工夫がなされるべきではあろう。

参考文献

- 柴崎秀子 (2014) 「リーダビリティ研究と「やさしい日本語」」, 『日本語教育』158号, 49-65.
- 李在鎬・長谷部陽一郎・柴崎秀子 (2009) 「読解教育支援のためのリーダビリティ測定ツールについて」, 『言語処理学会第15回年次大会 発表論文集』713-716.